

[調査報告] パピルス 46 番¹——最古のパウロ書簡集

伊藤明生

(東京基督教大学大学院教授)

概 要

パピルス 46 番とは、チェスター・ビーティー図書館所蔵の聖書パピルス (CBL BP) 2 とミシガン大学図書館所蔵パピルス目録 6238 のことである。カイロの業者がバラバラの束で販売したものをアルフレッド・チェスター・ビーティー²とミシガン大学が別々に購入した結果、元来はひとつのパピルス本であったものが、現在は二箇所別々に所蔵されている。先ず 1930-31 年にアルフレッド・チェスター・ビーティーが写本のうち 10 枚、ミシガン大学が 6 枚を購入した。そして、1932-33 年の冬にミシガン大学は、さらに 24 枚を購入し、その後アルフレッド・チェスター・ビーティーは 46 枚追加購入した。そして、1934 年から 1936 年にかけてパピルス 46 番は相次いで出版されて広く知られるようになった³。元来は 104 枚から

- 1 本報告を書き上げるに際して参考にした一次資料は、Karl Jaros et al., eds., *Das Neue Testament nach den Ältesten Griechischen Handschriften* (Ruhpolding: Verlag Franz Philipp Rutzen : Ruhpolding und Mainz / Wien und Würzburg: Echter Verlag, 2006). およびミシガン大学のウェブ (<http://www.lib.umich.edu/reading/Paul/index.html>) および新約聖書写本研究センター (The Center for the Study of New Testament Manuscripts) のウェブ (<http://www.csntm.org/>) である。パピルス 46 番の初期の研究としては、G. Zuntz, *The Text of the Epistles: A Disquisition upon the Corpus Paulinum* (The Schweich Lectures of the British Academy 1946; repr. ed. of 1953; Eugene Wipf and Stock, 2007) がある。Zuntz の研究の評価としては Michael W. Holmes, "The Text of the Epistles Sixty After: An Assessment of Günther Zuntz's Contribution to Text-Critical Methodology and History," in *Transmission and Reception: New Testament Text-Critical and Exegetical Studies* (Piscataway: Gorgias Press, 2006), 89-113. がある。
- 2 アルフレッド・チェスター・ビーティー (1875-1968 年) は、ニューヨーク生まれのアイランド系アメリカ人であったが、鉱山業で蓄えた富で多岐にわたる収集を行った。晩年、アイランドのダブリンにチェスター・ビーティー図書館を建築して、収集品を所蔵して展示する場所とした。収集品の中のパピルスは「チェスター・ビーティー・パピルス」と通称で知られる。
- 3 Frederic G. Kenyon, *The Chester Beatty Biblical Papyri*, fasc. 3.1, *Pauline Epistles and Revelation, Text* (London: Emery Walker, 1934); fasc. 3, supp. 3.1, *Pauline Epistles*,

構成していた写本であったが、現存することが知られているのは、以上の計86枚である。パピルス46番は、エジプトのファユーム県もしくは古代のアフロディトポリス近くの修道院か教会の廃墟で発見されたようであるが、業者からの購入であったために、出処の詳細は定かではない。

コデックス

パピルス46番は巻物ではなく、コデックス（冊子本）形態であった。パピルス46番には、綴じた跡などコデックスであった直接の証拠は残っていないが、パピルスの表と裏の両面に本文が続けて書き記されていることや、真ん中の52枚目までと53枚目以降でパピルスの表裏が逆転していることから、コデックスの形態であったことが確認できる。本来、コデックスは、メモや雑記帳やノート類として用いられ、正規の書籍の形態としては用いられていなかった。正規の書籍は、巻物の形態を取るのが、それまで普通であったが、キリスト教会でコデックスが正規の書籍の形態としても用いられるようになった⁴。その理由については様々に議論されてきた⁵が、今のところ定説はない。

書式、書体・・・

現行の章節は後代のものであるので、パピルス46番にはない。現行の章節などに類する段落区切りなども特に見当たらない。所々に文字が書かれていない空白部分があるが、基本的に単語と単語を分かち書きすることなく、アルファベットが左から右に羅列されている（scriptio continua）。単語の途中でも、普通にそのまま次の行に移っている。ユブシロンやイオータの上にドイツ語のウムラウトのような記号が見出されたり、時折、硬氣息符（hard breathing）が付けられたり、大きな区切りで右肩に黒点が記されていたりする⁶。しかし、基本アクセント記号も氣息

Text (London: Emery Walker, 1936); fasc. 3, supp. 32, *Pauline Epistles, Plates* (London: Emery Walker, 1937); Henry A. Sanders, *A Third-Century Papyrus Codex of the Epistles of Paul* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1935).

4 Colin H. Roberts and Theodore C. Skeat, *The Birth of the Codex* (Oxford: Oxford University Press, 2004; reprint of British Academy, 1983)を参照のこと。

5 例えば、コデックスの方がより多くの本文を書き留められる。読みたい箇所が即座に見つかる。他方、ルカの福音書と使徒の働きは、分量的にそれぞれ巻物一巻分であるので、当初、巻物に書き記された、と想定されている。

6 ただし、この種の記号は後の校訂者による付記であって、当初はなかったかもしれない。

符も句読点も本文に用いられていない。使用されているギリシア文字の書体は、シルヴァヌスフォントに類似している⁷。現代のギリシア文字の書体と少し異なり、大文字と小文字の区別もない。例えば、デルタはδではなく Δ である。シグマはσ、エプシロンはε であるので、シグマ (σ) とオミクロン (ο) とエプシロン (ε)、さらにシーター (θ) の文字の形態が類似していた。類似していても、丁寧に書き記せば、区別は容易にできるが、急いで書いたり、乱雑に書いたりすると判別しにくくなる。その結果、写字生たちは、時折、この四つの文字を混同する間違いを犯している。初めて見る者は戸惑うかもしれないが、現代のギリシア文字を習得していれば、判読するのは、さほど困難ではない⁸。

頁の大きさ、行数など

パピルス 46 番の保存状態は基本的に良好であるが、各頁の周り、特に各頁の下端は腐食していて、ほとんどの頁が原形を留めていない。各頁は本来 16cm× 27cm の長方形であったと思われる。現在は各頁に分かれた状態であるが、元来は二頁分の大きさであったパピルス紙 52 枚が重ねられて、真ん中で(綴じて)二つ折りにして、コデックスを構成していた⁹。その結果、パピルス紙の表裏¹⁰が 52 枚目までと 53 枚目以降とで逆になっている。本文を書いてから、製本したか、製本してあったものに本文を書いたか、という問いは興味深い。コデックスが雑記帳の類であったことから想像すると、コデックスの形態になったものに本文を書き記す方が自然かもしれないが、通常の(現代の)書籍の製造過程から推察すると、本文を書き記したパピルス紙をコデックスの形態に製本したと考えられる。

- 7 そのような訳で、本稿では、特別に氣息符やアクセント記号を表記することが必要なとき以外は、ギリシア語はシルヴァヌスフォントを用いて表記することにした。
- 8 “The script of the papyrus is in marked contrast to that of the Gospels and Acts MS. It is far more calligraphic in character, a rather large, free, and flowing hand with some pretensions to style and elegance, upright and square in formation, and well spaced out both between the letters and between the lines.” (Frederic G. Kenyon, *The Chester Beatty Biblical Papyri*, fasc. 3.1, *Pauline Epistles and Revelation*, Text [London: Emery Walker, 1934]: ix).
- 9 初期のコデックスに一般的である、single quire と称する単純な構成である。
- 10 パピルス紙は製造過程で繊維が垂直に交わるように、二枚を重ねて合わせて制作する。繊維が水平方向の面を recto と呼び、繊維が垂直方向の面を verso と呼ぶ。パピルス 46 の場合には、52 枚目までは偶数の頁が verso で、奇数の頁が recto であるが、53 枚以降では逆に偶数の頁が recto で、奇数の頁が verso となっている。

文字が書き記されている範囲は頁によって異なるが、11-15cm×20-22cmの大きさで、一頁には25行から31行の行数を数えることができ、一行には25文字から30文字が記されている。下の行に行くに従って、徐々に文字の大きさが小さくなり、文字と文字の間も狭くなっている。各頁の本文の一行目よりも一行空けた上部中央に頁数がギリシア文字で記載されている。現存する最初の頁は14頁で、最後の頁には191頁と記されている。この14頁から191頁の間で16頁から19頁と186頁から189頁の8頁が失われている。そして、頁数が書き込まれていない2頁がある。頁数が記入されていない頁は、101頁と書き記されるべき51枚目の裏、そして102頁と書き記される筈の52枚目の表である。その間違いを指摘するかのよう、52枚目の裏の頁の上部中央に「101 (pλ)」¹¹と記入されている頁数の上に横線が引いてある。写字生が本文を写し終えて、校訂者が頁数を書き込む際に、パピルスの51枚目と52枚目がくっついていて二枚一緒にめくったが、それに気が付かなかった結果、この2頁の頁数が未記入のままとなった。各書の最後の行に一行空けて右端に行数がギリシア文字で書き留められている。写字生は、一行当たりいくらずで賃金が支払われたので、行数が書き留められたものと思われる。筆跡から言っても、写字生とは別の校訂者が、書写した後に頁数と行数を書き記したものと思われる。

「ノミナ・サクラ」

コデックスという書籍の形態と共にキリスト教の書籍に見出せる特徴¹²として「ノミナ・サクラ（聖なる名前）」がある¹³。「ノミナ・サクラ」もパピルス46番に認められる。「キリスト」「イエス」「主」「御子」「御霊」などの語が前と後の二文字程度に省略されて、文字の上に横線が引かれている表記方法である。例

11 ギリシア文字のロー (ρ) が百、アルファ (α) が一を意味するので、ローとアルファ (pα)。

12 多くの関係書籍で指摘されているが、例えば、David G. Martinez, "The Papyri and Early Christianity," in *The Oxford Handbook of Papyrology*, ed. Roger S. Bagnall (Oxford: Oxford University Press, 2009), 592-93を参照のこと。しかし、例外がない訳ではない。Greg H.R. Horsley, ed., *New Documents Illustrating Early Christianity, vol. I: A Review of the Greek Inscriptions and Papyri published in 1976* (Ancient History Documentary Research Center, Macquarie University, 1981), 107-12.

13 nomina sacra とはラテン語で「聖なる名前 (nomen sacrum)」の複数形である。古典的研究書として Ludwig Traube, *Nomina Sacra: Versuch einer Geschichte der Christlichen Kürzung* (München: C.H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1907)がある。

えば、コリント人への手紙第一 1 章 1 節のギリシア語本文 (Nestle-Aland 28) は Παῦλος κλητὸς ἀπόστολος Χριστοῦ Ἰησοῦ διὰ θελήματος θεοῦ καὶ Σωσθένης ὁ ἀδελφὸς¹⁴ で、「ノミナ・サクラ」以外はパピルス 46 番の本文と一致している。三つの神名は、下記のそれぞれ矢印の右側のように表記されて、上に横線が¹⁵付されている。

Χριστοῦ ⇒ ΧΡΥ

Ἰησοῦ ⇒ ΙΗΥ

θεοῦ ⇒ ΘΥ

コリント人への手紙第一のパピルス 46 番 74 頁 (次頁・写真 1 を参照) の本文の 1 行目と 2 行目は、シルヴァヌスフォントを用いて表記すると、ほぼ以下の通りである。(ノミナ・サクラの上には横線)

ΠΑΥΛΟΣ ΚΛΗΤΟΣ ΑΠΟΣΤΟΛΟΣ ΧΡΥ ΙΗΥ
ΔΙΑ ΘΕΛΗΜΑΤΟΣ ΘΥ ΚΑΙ ΣΩΘΗΝΗΣ

ギリシア語の名詞には格語尾変化があるが、最後の文字で格が判別できる仕組みになっている。以下は、主 (κύριος) の「ノミナ・サクラ」表記で、実際は上に横線が¹⁶付されている。括弧内は使用箇所 (ローマ人への手紙) の例である。

κύριος (主格) → ΚΣ (9 章 28 節 29 節 = 24 頁 15 行目 16 行目)

κυρίου (属格) → ΚΥ (10 章 13 節 = 26 頁 2 行目)

κυρίῳ (与格) → ΚΩ (8 章 39 節 = 22 頁 7 行目)

κύριον (对格) → ΚΝ (13 章 14 節 = 33 頁 7 行目)

κυριε (呼格) → ΚΕ (10 章 16 節 = 26 頁 9 行目)

神名のうち「御霊」を意味する πνεῦμα は省略されて「ノミナ・サクラ」に表記されるときとされないときがある。「御霊」の意味か、御霊以外の「霊」であるかの判断によって表記が区別されたか、あるいは、それ以外に区別する基準があった

14 新改訳聖書第 3 版では「神のみこころによってキリスト・イエスの使徒として召されたパウロと、兄弟ソステネから、」。パピルス 46 番では 74 頁に見出される。

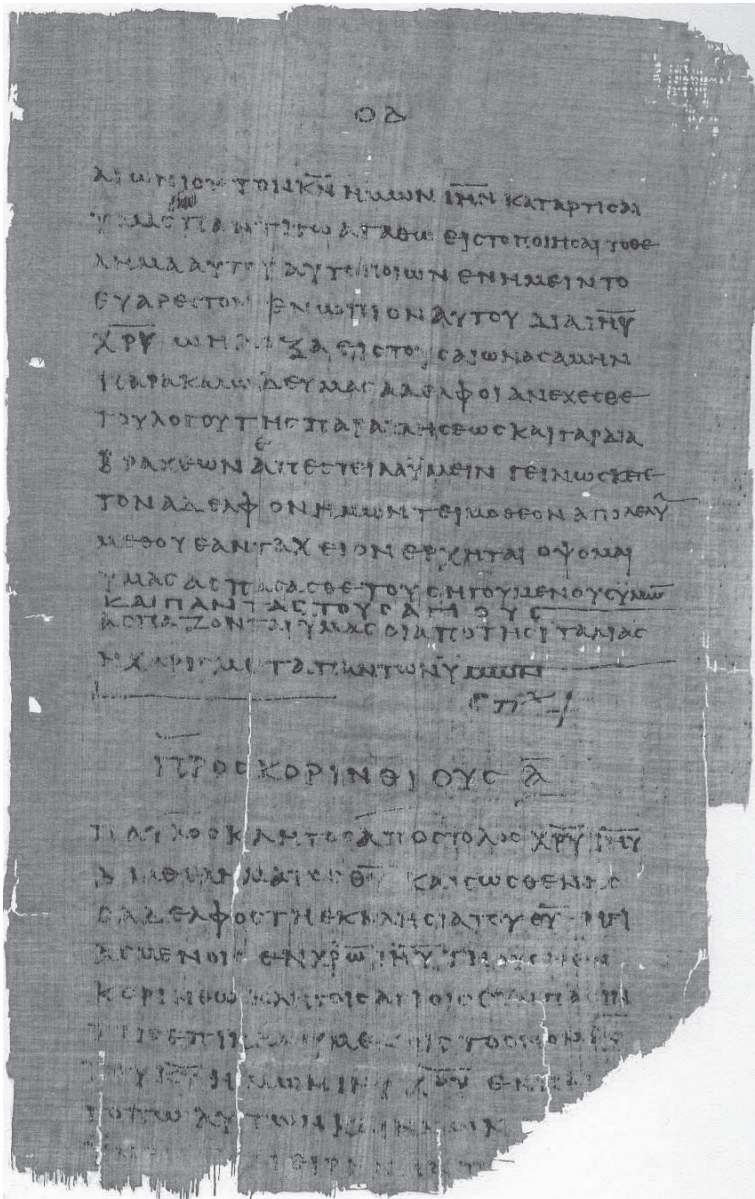


写真1 パピルス46番の74頁(チェスタービーティー図書館蔵)

か個々の箇所にあたって見る必要がある¹⁵。

「ノミナ・サクラ」とは別に「人間 (ἄνθρωπος)」と「十字架 (σταυρός)」は省略して表記されることがある。例えば、コリント人への手紙第一 2 章 9 節 (78 頁 20 行目) では ἀνθρώπου の代わりに λΝΟΥ、14 節 (79 頁 9 行目) では ἄνθρωπος と書く代わりに λΝΟC と略記され、3 章 3 節 (79 頁 24 行目) でも ἄνθρωπον の代わりに λΝΟΝ と記されている。省略されない場合もあり、省略するかどうかという基準で判断したか定かではない。

同じコリント人への手紙第一 1 章 17 節 (76 頁 8 行目) で ὁ σταυρὸς τοῦ Χριστοῦ は省略されて ΟCΤΡΟCΤΟΥΧΡΥ と記されて、次節 18 節 (同じ行) で ὁ λόγος γὰρ ὁ τοῦ σταυροῦ は ΟΛΟΓΟCΓΛΡΤΟΥCΤΡΟΥ¹⁶ と表記されている。2 章 8 節 (78 頁 18 行目) では ἐσταύρωσαν (「十字架につける」という動詞 σταυρόω の直説法アオリスト能動相 3 人称複数形) と書くところに ΕCΤΡΑΝ と略記されている。すべて省略表記の上には横線が引かれている。頻繁に使用される用語を略記してスペースを節約する以上の意図はないのか、背後にある意図は不明である¹⁷。

「パウロ書簡集」

バピルス 46 番は「パウロ書簡集」と描写することは許されると思うが、収録されたパウロ書簡は、具体的にはローマ人への手紙、ヘブル人への手紙、コリント人への手紙第一、コリント人への手紙第二、エペソ人への手紙、ガラテヤ人への手紙、ピリピ人への手紙、コロサイ人への手紙、テサロニケ人への手紙第一で、この順序に収録されている。ヘブル人への手紙がパウロ書簡に数えられるのは、東方教会の伝統であるが、ローマ人への手紙の直後に置かれるのは珍しい。最初の 13 頁が失われているので、現存する写本はローマ人への手紙 5 章 17 節から始まっている。現存する最後の 191 頁はテサロニケ人への手紙第一 5 章で終わっている。失われ

15 例えば、ローマ人への手紙 8 章 15 節で一回、16 節に二回名詞 πνεῦμα が見出される。バピルス 46 番 (20 頁) では、「子とされる霊 (πνεῦμα υιοθεσίας)」という 15 節 (1 行目) では省略されないで πνευμα と記されているが、16 節の「御霊ご自身が……」では πνα と略記されている (2 行目)。16 節の「私たちの霊」の「霊」の部分 (3 行目冒頭) は写本に欠損があり、判読できないが、スペースからすると πνι と略記されたものと思われる。

16 尚、バピルス 46 番の本文には 2 番目の冠詞 ὁ はない。

17 以上のような略記とは別に行の右端では語末のアルファベットを省略して横線が引かれていることが度々見受けられる。

ている最後の数頁にパウロ書簡のどの書が含まれていたか議論がある¹⁸が、大多数の学者たちは、テモテとテトス宛ての「牧会書簡」は含まれていなかったと考えている。すると、空白の頁があったことになる、など議論がある。いずれにしても正典論とも関連して興味深い問いである。

各書の書名は、現行の書名がギリシア語で各書の冒頭に記されているので、書名は既に確定していたと思われる。書名が記された位置は、前の書の本文が終わり、右端に行数が書き記された後、一行強の空白が空けられて、中央に記されている。書名の後に一行強が空けられて、本文が書き始められている。空白が意図的であることを示すために、波状の横線が引かれている。

作成年代

写本の作成年代については様々に推測されてきた¹⁹が、昨今は紀元200年という年代に落ち着いている²⁰。一言で言うと、パピルス46番はパウロ書簡集として現存

-
- 18 Jeremy Duff は牧会書簡も含まれていたと論じている (“P46 and the Pastorals: A Misleading Consensus?,” *New Testament Studies* 44 [1998]: 578–90)。
- 19 Frederic G. Kenyon は3世紀前半 (*The Chester Beatty Biblical Papyri* 3.1, p. ix) に、Philip W. Comfort and David P. Barrett は2世紀の半ば (*The Text of the Earliest New Testament Greek Manuscripts: A Corrected, Enlarged Edition of the Complete Text of the Earliest New Testament Manuscripts* [Wheaton: Tyndale House Publishers, 2001], 204–06) に年代決定している。紀元1世紀中に年代決定する議論については Young Kyu Kim, “Palaeographical Dating of P46 to the Later First Century,” *Biblica* 69 (1988): 248–57 を参照のこと。
- 20 Institute for New Testament Textual Research, ed., *Nestle-Aland Novum Testamentum Graece* (28th rev. ed.; Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2012), 794; Kurt Aland and Barbara Aland, trans. Erroll F. Rhodes, *The Text of the New Testament: An Introduction to the Critical Editions and to the Theory and Practice of Modern Textual Criticism* (2nd ed.; Grand Rapids: William B. Eerdmans, 1989), 99; Barbara Aland, *Das Neue Testament auf Papyrus II Die Paulinischen Briefe Teil 1: Röm., 1. Kor., 2. Kor.* (Berlin: Walter de Gruyter, 1989), xlv–xlv; Bruce M. Metzger and Bart D. Ehrman, *The Text of the New Testament: Its Transmission, Corruption, and Restoration* (4th ed.; Oxford: Oxford University Press, 2005), 54; David C. Parker, *An Introduction to the New Testament Manuscripts and Their Texts* (Cambridge: Cambridge University Press, 2008), 252; James R. Royse, *Scribal Habits in Early Greek New Testament Papyri* (Atlanta: Society of Biblical Literature/Leiden: Brill, 2008), 199 など。

する最古の写本である。この時点で既に書簡集として収集されていたことは興味深い。写本が最古であるとは、それ以前の写本が失われたことを意味するだけで、写本の本文が信頼できるかどうかは別問題である。写本作成年代以上に写本の本文が正確であることを保証する重要な事柄は、写本を作成する際に底本として用いた写本の本文と写字生の書写の正確さである。紀元 200 年にパピルス 46 番が作成されたとして、パウロの手紙そのものとパピルス 46 番との間に何人かの写字生といくつかの写本が介在した。介在した写字生の人数と写本の数は、パピルス 46 番の本文の質を知る上で、重要な問いではあるかもしれないが、その答えはわからない。

以下で、パピルス 46 番の本文の質に拘わる事柄についても少し検討する。本パピルスに限らないことであるが、写本の本文を研究する際に、間違いや異読、さらに訂正から、写字生の仕事の質や、使用した底本の系譜などを割り出せることがあるので、たびたび書き写し間違いや異読に着目する。パピルス 46 番はパウロ書簡集で最古の写本であるので、パピルス 46 番の写字生が底本として用いた写本は見つかっていない。本稿では、パピルス 46 番の本文を Nestle-Aland 28 版の本文と比較検討する手順を採用する。このような手順には、方法論上、課題はある。ただ現実的な方法であるので、方法論上、課題があるとしても、ここでは、そのような手順に従う。

1. 「パピルス 46 番の写字生の大失態」²¹

間違いであると一目瞭然である間違いが、パピルス 46 番には珍しくない。ただ、この種の間違いは、万遍なく均等に見出されるのではなく、ヘブル人への手紙などで特に目立つ間違いである。以下、パピルス 46 番に見出される間違いを、ヘブル人への手紙を中心に見ていく。大多数は単純な間違いで、中には問題外の間違いも見出される。

ヘブル人への手紙 5 章 6 節 (48 頁 21 行目²² の冒頭) で ιερευς と書くべきところに επευξ と記されている²³が、その上の行間に ιερευς と訂正が施されている。同じヘブル人への手紙 8 章 5 節 (55 頁 17 行目) で γαρ と記すべきところに γρα

21 G. Zuntz の表現 “scribal blunders” (*The Text of the Epistles*, 18) を借用。

22 パピルス 46 番は、古い写本であるので、各頁の下部分は多くの場合に腐食が進んでいるので、行数は上から数えることにする。

23 この不可解な単語は、ギリシア文字とラテン文字 (ローマ字) との混同から生じたものか。

と書いたうえに、アルファを消してガンマとローの間にアルファが書き込まれている。さらに9章3節(57頁の2行目の右端)で $\lambda\Gamma\iota\alpha$ と書くべきところに $\lambda\Nu\alpha$ と記している。この間違いは、当時のギリシア文字で、ニュー (\Nu) とガンマ+イオータ ($=\Gamma\iota$) が類似していることに起因すると思われる。しかし、意味を少し考えれば、気が付きそうな間違いであるが、訂正された跡はない。6章1節で(49頁19行目の冒頭)、 $\tau\epsilon\lambda\epsilon\iota\omicron\tau\eta\tau\alpha$ の代わりに $\theta\epsilon\mu\epsilon\lambda\iota\omicron\tau\eta\tau\alpha$ と記されているが、訂正された跡はない。次の単語も語尾の一部を間違えて $\phi\epsilon\rho\omega\nu\epsilon\theta\alpha$ と記されているが、 $\phi\epsilon\rho\omega\mu\epsilon\theta\alpha$ が正しい。ここはニューがミューに訂正されている。6章9節で(50頁14行目)、 $\lambda\lambda\lambda\omicron\upsilon\mu\epsilon\Nu$ と書くべきところに $\epsilon\lambda\lambda\beta\omicron\mu\epsilon\Nu$ と記しているが、訂正した跡はない。7章1節2節(51頁23行目と52頁4行目冒頭)で $\sigma\alpha\lambda\eta\mu$ と記すべきところに $\sigma\alpha\mu\omicron\upsilon\eta\lambda$ と書いてあったので、 $\sigma\alpha\lambda\eta\mu$ に訂正されている。写字生は「サレム」という地名を知らなかったので「サムエル」と勘違いしたか、それとも底本に $\sigma\alpha\mu\omicron\upsilon\eta\lambda$ と記されていたか、確認する術はない。10章24節で(62頁8行目冒頭)前置詞 $\epsilon\iota\varsigma$ とあるべきところに $\epsilon\kappa$ と書き記して、次の名詞の格語尾を属格に変更している。ギリシア文字の形状からイオータ+シグマ($\iota\varsigma$)とカッパ(κ)とが紛らわしかったことは事実であるが、余り意味を考えないで書写した結果と思われる。6章6節や7章15節では動詞の語尾を間違えて書き写している。6章6節で(50頁4行目右端)は $\lambda\Nu\alpha\sigma\tau\alpha\gamma\rho\omicron\upsilon\Nu\tau\alpha\varsigma$ (複数対格)と記すべきところに $\lambda\Nu\alpha\sigma\tau\alpha\gamma\rho\omicron\upsilon\Nu\tau\epsilon\varsigma$ (複数主格)と書き記している²⁴。7章15節で(53頁15行目)は $\lambda\Nu\iota\sigma\tau\alpha\sigma\tau\alpha\iota$ とするべきところに $\lambda\Nu\iota\sigma\tau\alpha\sigma\theta\alpha\iota$ (不定法)と書いている。このような動詞の語尾は、発音上ほとんど区別がないが、文法的には異なる形であるために意味の相違が生じる。7章2節(52頁4行目)では、関係代名詞 $\delta\varsigma$ が $\delta\varsigma$ と中性形から男性形に変更されている。7章16節では冒頭の関係代名詞 $\delta\varsigma$ がバピルス46番(53頁16行目)では欠落している。

省略する間違いは頻繁に見出される。単語の一部が省略される例には²⁵、6章11節(50頁19行目)の $\epsilon\Nu\delta\epsilon\iota\kappa\Nu\gamma\sigma\theta\alpha\iota$ の語頭の $\epsilon\Nu$ の省略、7章19節(53頁22行目)冒頭の $\omicron\Upsilon\delta\epsilon\Nu$ の語末の $\epsilon\Nu$ の省略、7章27節(54頁22行目)の

24 ただし、ここでは「十字架につける」という動詞であるので、実際には $\lambda\Nu\alpha\sigma\tau\epsilon\varsigma$ と略記されている。

25 単語と単語を分かち書きしていなかったため、単語の一部の省略がどうか区別することには意味がないようにも思われる。また、単語の一部が省略されても意味が余り異なる場合もある。

εφπλαξの語頭のεφの省略などを挙げることができる。

さらに、5章12節(49頁9行目)の冠詞τα、7章18節(53頁20行目)の接続詞μεν、6章11節(50頁18～19行目)の接続詞δεは省略されている。コリント人への手紙第一9章7節(94頁12行目)ではτης ποιμνηςが省かれ、10章28節(99頁20行目)ではτον μηνυσαντα και την²⁶や15章40節(114頁3行目)ではεπουρανιων δοξα ετερα δε ηが省略されている。さらにヘブル人への手紙8章8節(55頁25行目)では, ιδου ημεραι ερχονται λεγειが省略されているが、この省略に気が付いた訂正者が挿入記号を書き残している。8章12節(56頁17行目)は、前半が省略されている。9章14節(58頁17行目)ではκαθαριει την συνειδησιν ημων απο νεκρων εργων εις το λατρευειν θωが省略されているが、挿入記号が付けられている。12章6節以下(69頁16行目)では、6節後半と7節のπατηρを除いたすべてが省略されているが、ここも挿入記号が付けられている。

これ以外には、イオータ(ι)とエプシロン+イオータ(ει)、あるいはエプシロン(ε)とアルファ+イオータ(αι)など、発音上区別がない場合に、綴りを混同する間違いが見出される。発音上区別が曖昧なために、綴りを間違えたのかもしれないが、まだ正書法が確立していなかった時代であるので、正しい綴りが確立していなかった可能性もある。

以上のように、大きな間違いを列举すると、読者は、パピルス 46 番の本文に対する信頼性に関して疑念を抱くかもしれない。そこで二つの点に注意を促したい。一つは、この種の単純で一目瞭然である間違いはヘブル人への手紙の一部などに集中している。まるで、写字生が突然、疲労困憊に陥ったか、睡魔に襲われたかのように単純な間違いを集中的に繰り返している。具体的な理由はわからないが、何らかの理由で、急に集中力を失って単純な間違いを連発したものと思われる。この種の間違いは、間違いであると容易に判明するので、本文研究上、余り問題とはならない。もう一つの重要な課題は、パピルス 46 番を書写する際に底本として使用した写本は見つかっていないことである。底本がわからない以上、厳密には書写そのものの正確さはわからない。以上、指摘した「間違い」は、あくまでも Nestle-Aland 28 版の本文と比較検討した結果である。

26 Nestle-Aland 28 版の脚注では、次の単語 συνειδησιν までパピルス 46 番で省略されているように表記されているが、これは間違いである。ただし συνειδησιν が正しい綴りである。

2. 訂正の手

パピルス 46 番を読み進めて、気が付かされることは、以上のような間違いだけではなく、訂正の手が、しかも複数入っていることである。先ず、写字生が書写しながら (in scribendo) 自ら訂正した、と思われる箇所がいくつかある。James R. Royse は、そのような箇所としてローマ人への手紙 9 章 20 節、ヘブル人への手紙 2 章 7 節、3 章 7 節、9 章 22 節 b、13 章 18 節 a、コリント人への手紙第一 3 章 20 節、11 章 27 節、14 章 9 節、コリント人への手紙第二 7 章 10 節、ガラテヤ人への手紙 1 章 14 節、ピリピ人への手紙 1 章 23 節の 11 箇所を列挙している²⁷。書写しながらの訂正は、特に写字生の書写作業の様子を垣間見ることができる。興味深いので、少し詳細に見ることにする。

ローマ人への手紙 9 章 20 節 (23 頁 23 行目) では、動詞 ΠΑΛΑΝΤΙ の後に目的語として ΑΥΤΟ を書こうとして、ΑΥ まで書いて間違いであると気が付いた写字生が消している。ヘブル人への手紙 2 章 7 節 (43 頁 12 行目) では、ΒΡΑΧΥΤΙC と書いた時点で最後のシグマをピーに訂正して、ΠΑΡ と書き改めている。同じヘブル人への手紙 3 章 7 節 (45 頁 12 行目冒頭) では、ΜΟΥ と書いた後で消して、隣に ΑΥΤΟΥ と書き記している。9 章 22 節 b (59 頁 13 行目右端) で ΚΑΙ CΧΕΔΟΝ が黒点で消されている。この 2 単語は、前の行の冒頭に見出されるので、写字生の目が一旦、そこまで戻ってしまったことを証拠立てる。でも、その間違いに気が付いて、削除したものと思われる。そして、行を改めて、本来の箇所から書き写している。

ヘブル人への手紙 13 章 18 節 a (73 頁 21 行目右端から 22 行目冒頭にかけて) で一旦 ΚΑΛ まで書いてから、最後のラムダを消して次の行の冒頭にラムダから書き始めて単語の残り ΑΗΝ を記している。コリント人への手紙第一 3 章 20 節 (81 頁 14 行目) は写字生が書写の作業の途中で訂正したものであるか判断は難しいが、たぶん ΑΥΤΩΝ と書き写したときに、次が COΦΩΝ であることに気が付いて ΑΥ を消して、次の COΦΩΝ を書き記した結果 ΑΥΤΩΝ COΦΩΝ が残った。同じコリント人への手紙第一 11 章 27 節 (101 頁 3 行目) では前節の ΕΑΝ²⁸ と同じように書こうとしてエプシロンを書いた時点で、ここは ΕΑΝ ではなく ΑΝ であることに気が付いてエプシロンをアルファに訂正して ΑΝ と書き改めている。

27 Royse, *Scribal Habits in Early Greek New Testament Papyri*, 25-27.

28 この行に当たる、26 節の部分は前の頁の一番下の行で、失われている。

コリント人への手紙第一 14 章 9 節 (107 頁 11 行目) に $\lambda\gamma\lambda\omicron\upsilon\mu\epsilon\eta\omicron\nu$ と最初に書いたのは、7 節の $\pi\omega\varsigma\ \gamma\nu\omega\theta\eta\varsigma\epsilon\tau\alpha\iota\ \tau\omicron$ まで目が戻ってしまったためであろう。ただ $\lambda\gamma\lambda\omicron\upsilon\mu\epsilon\eta\omicron\nu$ まで書いた時点で間違いに気が付いて、 $\lambda\gamma\lambda\omicron\upsilon\mu\epsilon\eta\omicron\nu$ の $\lambda\gamma$ を $\lambda\lambda$ に訂正したので、 $\lambda\lambda\lambda\omicron\upsilon\mu\epsilon\eta\omicron\nu$ となって、次の行の冒頭から、続きを書き写している。コリント人への手紙第二 7 章 10 節 (131 頁 18 行目) では、カッパがガンマに変えられて $\gamma\lambda\rho$ と書き改められている。当初、写字生は $\gamma\lambda\rho$ を飛ばして次の単語 $\kappa\alpha\tau\alpha$ を書こうとしたが、カッパを書いた時点で間違いに気が付いてガンマに変えたものと思われる。ガラテヤ諸教会宛の手紙 1 章 14 節 (159 頁 12 行目) では当初 $\pi\epsilon\rho\iota\varsigma\varsigma\omicron\tau\epsilon\rho\omicron\nu$ と書き記したが、 $\pi\epsilon\rho\iota\varsigma\varsigma\omicron\tau\epsilon\rho\omega\varsigma$ の間違いであることに気付いて $\omicron\mathbf{N}$ を消して $\omega\varsigma$ を書き加えて、続きを書き写している。意味は同じであるが、前者は形容詞の中性単数の形で、後者は副詞である。ピリピ人への手紙 1 章 23 節 (170 頁 14 行目) で写字生は最初、 $\epsilon\mathbf{N}\chi\omega$ つまり、 $\epsilon\mathbf{N}\ \chi\rho\iota\varsigma\tau\omicron\mu$ ($\chi\omega$ は「ノーメン・サクルム」²⁹⁾) と書いたが、間違いに気が付いて、エプシロンの後の \mathbf{N} を削除してオメガの後に \mathbf{N} を加えて $\epsilon\chi\omega\mathbf{N}$ (動詞 $\epsilon\chi\omega$ の現在分詞男性単数主格形) に訂正した。

以上、書写しながら訂正したと思われる箇所を概観した。既に概観した、目が先に移って省略してしまう間違いと比べると目が前に戻る間違いの方が、その場で間違いに気付いて訂正しやすいことがわかる。単語と単語とが分かち書きされていない当時の、今考えると書写の作業は想像以上に困難を極めたに違いない。自ら間違いに気付いて訂正できたことは良いとしても、写字生が注意散漫で、書写に集中できない状態で書写していたようにも思われる。あるいは根を詰めて書写作業を続けた過労のせいであろうか。逆に言うと、不注意程度の間違いであったので、書写しながらでも間違いに気付いて訂正することができたのかもしれない。

書写しながらの訂正でないとしても、写生字自身が訂正したと思われる箇所は他にもある。例えば、ローマ人への手紙 13 章 14 節 (33 頁 6 行目) の動詞が先ず不定法の語尾で $\epsilon\text{N}\Delta\Upsilon\alpha\text{C}\Theta\alpha\iota$ と書き記された後で、 $\alpha\iota$ の上に ϵ と記して命令法の $\epsilon\text{N}\Delta\Upsilon\alpha\text{C}\Theta\epsilon$ に訂正されている。コリント人への手紙第一 8 章 10 節 (93 頁 12 行目) で一旦 $\epsilon\iota\Delta\omega\lambda\lambda\alpha\theta\Upsilon\tau\alpha$ と書いた後にアルファを消して上の行間にオミクロンを書き加えて $\epsilon\iota\Delta\omega\lambda\theta\epsilon\Upsilon\tau\alpha$ と訂正してある。ヘブル人への手紙 12 章 28 節 (71 頁 23 行目冒頭) で $\epsilon\chi\omicron\mu\epsilon\text{N}$ と (直説法) 書いた後にオミクロンの上にオメガを書

29 ラテン語「ノミナ・サクラ」の単数形。

き加えて接続法 $\epsilon\chi\omega\mu\epsilon\eta$ に訂正している。コリント人への手紙第一 13 章 12 節 (106 頁 3 行目) に綴りを間違えて $\pi\rho\omicron\varsigma\omicron\pi\omicron\tau\omicron\eta$ と書いたのも、真ん中のオミクロンの上にオメガを書き込んで $\pi\rho\omicron\varsigma\omega\pi\omicron\tau\omicron\eta$ と訂正した跡がある。ヘブル人への手紙 6 章 1 節 (49 頁 19 行目) $\phi\epsilon\rho\omega\eta\epsilon\theta\alpha$ と最初に書いたのも、ニューの上の行間にミューを記して $\phi\epsilon\rho\omega\mu\epsilon\theta\alpha$ と訂正してある。

写字生が書きそびれた文字を加えて訂正されている箇所もある。コリント人への手紙第一 7 章 15 節 (89 頁 12 行目) で写字生は初めエーターを一つ書いたただけであったが、次の単語 $\lambda\delta\epsilon\lambda\phi\eta$ と η との間にもう一つエーターを付け加えている。女性名詞 $\lambda\delta\epsilon\lambda\phi\eta$ の冠詞のエーターと「また／あるいは」を意味する接続詞のエーターと二つ並ぶ箇所であるので紛らわしかったのであろう (haplography の間違い)。コリント人への手紙第二 10 章 15 節 (138 頁 12 行目) で最初 $\tau\alpha\ \mu\epsilon\tau\rho\alpha$ と書いたが、意味が逆であることに気が付いて、 $\tau\alpha$ の後にもう一つアルファを書き込んで、 $\tau\alpha\ \alpha\mu\epsilon\tau\rho\alpha$ と訂正してある (これも haplography の間違い)。

間違えて書いた単語を別の正しい単語に訂正している場合もある。ヘブル人への手紙 11 章 34 節 (67 頁 25 行目) で前置詞 $\epsilon\pi\iota$ と書いたのを $\lambda\pi\omicron$ に訂正している。ヘブル人への手紙 12 章 4 節 (69 頁 9 行目) で $\omicron\pi\omicron\upsilon$ と書いたところ、冒頭のオミクロンとピーの間にユプシロンを挿入して、語末のオミクロンとユプシロンの上にオメガを記して、 $\omicron\upsilon\pi\omega$ と訂正してある。以上、写字生が本文を書写した後に、自身で本文を確認した際に訂正した、と思われる箇所である。写字生自身の訂正の後に、「正規の」訂正の手が入ったようである。

この第二の訂正の手は、頁数や各書の行数を書き込んだ者と同じ手で、写字生の仕事を確認・検査する立場にある「正規」の校訂者のものと思われる。パピルス 46 番の頁数や行数を書き込んだ手は、写字生自身のそれとは異なる手であることは既に指摘した通りである。既に見たヘブル人への手紙 5 章 6 節 (48 頁 21 行目 “ $\epsilon\pi\epsilon\upsilon\chi\zeta$ ”) と 8 章 5 節 (55 頁 17 行目 “ $\Gamma\rho\alpha$ ”) の間違いを訂正したのは、この第二の「正規の」訂正者と思われる。7 章 1 節 (51 頁 23 行目) と 2 節 (52 頁 4 行目) で $\varsigma\alpha\mu\omicron\upsilon\eta\lambda$ を $\varsigma\alpha\lambda\eta\eta\mu$ に訂正したのも、この訂正者と思われる。

ヘブル人への手紙では、他に 9 章 22 節で $\eta\epsilon\kappa\rho\omega$ と書き記されてあったのを $\alpha\iota\mu\alpha\tau\iota$ に訂正してある (59 頁 13 行目)。黒い明瞭な文字で訂正されている。写字生が抜かした文字を書き加えている場合もある。11 章 35 節 (68 頁 3 行目) で $\lambda\pi\omicron\lambda\upsilon\varsigma\iota\eta$ と記されているので、抜けている $\tau\rho\omega$ を上の行間に書き加えて $\lambda\pi\omicron\lambda\upsilon\tau\rho\omega\varsigma\iota\eta$ に訂正している。10 章 25 節 (62 頁 10 行目) では “($\kappa\lambda\theta\omega\varsigma$)

ΕΘΟΣ ΤΙ(ΣΙΝ) ΑΛΛΑ” の括弧内が抜けていたので行間に付け加えている。10 章 37 節 (63 頁 17 行目) では繰り返されるべき ΟCΟΝ が一度のみなので、上の行間に ΟCΟΝ を加えて訂正されている (haplography の間違い)。ヘブル人への手紙の最後 (74 頁 13 行目) で写字生が書き落とした三つの文字 ΜΩΝ を加えて単語 ΥΜΩΝ を完成している。どうやら写字生は、ユブシロンを書いて単語を最後まで書き記す前に書き終えて、行の残りは空白であることの目印として波状の横線を書いてしまったようだ。そこで、第二の訂正者は、その横線に重なる形で ΜΩΝ を書き加えている。さらに、同じ頁の 12 行目の冒頭にある筈の単語四つも抜けていたので、11 行目と 12 行目の行間に ΚΑΙ ΠΑΝΤΑΣ ΤΟΥΣ ΑΓΙΟΥΣ と書き加えている。そのために行間が詰まっているように見える (写真 1 参照)。それほど明らかではない間違いにも気が付いて訂正を施している箇所もある。ヘブル人への手紙 11 章 21 節 (66 頁 8 行目から 9 行目にかけて) で ΑΥΤΟΥ と記されているが、ΙΩCΗΦ の間違いであることに気が付いて訂正している (8 行目最後)。12 章 10 節 (69 頁 24 行目) で ΓΑΡ を加えて訂正している。

パピルス 46 番では、既に見たとおりに長めに省略されている箇所も決して珍しくない。例えば、ヘブル人への手紙 9 章 14 節の後半部分の θεῷ から θεῷ が抜けていて、最初の τῷ θεῷ の後に節の最後の τῷ ζῶντι という単語が記されている (58 頁 17 行目)。その結果 καθαριεῖ τὴν συνείδησιν ἡμῶν ἀπὸ νεκρῶν ἔργων εἰς τὸ λατρεύειν θεῷ が省かれている。このことに気が付いた訂正者は、τῷ ζῶντι の上に黒点を加えて削除を明記して、挿入記号を付加している。上記の挿入すべき一文は (頁の下方の?) 欄外に書き留めたものと思われるが、挿入すべき一文は現存する写本では認められない。さらにヘブル人への手紙 12 章 6 節の後半部分は抜け落ちて、さらにヘブル人への手紙 12 章 7 節に対応するのは、πατήρ 一単語のみである (69 頁 16 行目)。省略された部分は μαστιγοῖ δὲ πάντα υἱὸν ὃν παραδέχεται. εἰς παιδείαν ὑπομένετε, ὡς υἱοῖς ὑμῖν προσφέρεται ὁ θεός. τίς γὰρ υἱὸς ὃν οὐ παιδεύει である。9 章 14 節と同じように、6 節の同じ単語 (παιδεύει) から 7 節の同じ単語 (παιδεύει) に写字生の目が移った結果、この省略の間違いは生じた。訂正者は、ここでも挿入記号を付している、欄外に挿入すべき文を書き記したものと思われる。

この「正規の」訂正者は、既に指摘した通りに頁数を書き込みそびれて、頁数を二頁飛ばしている。中には訂正する必要のないような「訂正」も見出される。ヘブル人への手紙 10 章 24 節 (62 頁 7 行目) で ΚΑΤΑΝΩΜΕΝ と現在接続法である

ところに HC を挿入して ΚΑΤΑΝΟΗCΩΜΕΝ とアオリスト接続法に「訂正」しているが、Nestle–Aland 28 版の本文には ΚΑΤΑΝΩΜΕΝ が採用され、脚注に異読の記載はない。

写字生および第二の訂正以外にも訂正の手は見出せる。第三の訂正の手は、例えば、コリント人への手紙第一 14 章 10 節 (107 頁 13 行目) で省略されていた ΓΕΝΗ を加えたり、12 章 20 節 (103 頁 16 行目) で落ちている ΜΕΝ を補ったりして訂正を施している。この第三の訂正の手は、文字の形状から、写字生の訂正および第二訂正と区別することができる。第二の訂正が「正規の」訂正であって、頁数や行数を書き込む責任ある訂正であると共に、写本作成当時の訂正であった、と思われる。ところが、第三の訂正は、写本作成当初の訂正と比べると、後の訂正であったと思われる。

コリント人への手紙第一 15 章 2 節 (110 頁 19 行目冒頭。次頁・写真 2 を参照) では一旦書いた ΚΑΤΕΧΕΙΝ の上に黒点を付して削除した上で、次に ΕΙ ΚΑΤΕΧΕΤΕ と書き記している。それだけであれば、写字生が書写している際に、ΕΙ ΚΑΤΕΧΕΤΕ と書き記すべきところに間違えて ΚΑΤΕΧΕΙΝ と書いたので、間違いを削除した上で、正しい読みを書いて訂正した、と理解することができる。ところが、実際には 18 行目に ΥΜΕΙΝ (本来ならば ΥΜΙΝ と書くべきところ) と書き記して、空白を残したまま、次の行に移って冒頭に ΚΑΤΕΧΕΙΝ と記しているので、それほど単純な現象ではない (写真②参照)。さらにベザ写本には、ΟΦΕΙΛΕΤΕ ΚΑΤΕΧΕΙΝ という異読も見出されるので、パピルス 46 番の写字生が底本として用いていた写本に、何らかの形で ΚΑΤΕΧΕΙΝ と ΕΙ ΚΑΤΕΧΕΤΕ という二つの読みが記されていて (一方がもう一方の訂正か)、写字生はどちらの読みを本文に採用すべきか決めかねて、両方を併記した可能性が指摘されている³⁰。とすると、写字生自身は、二つの読みを併記したままに残して、写字生以外の訂正の手が ΚΑΤΕΧΕΙΝ を削除したことになる。

以上のような、写本に施されている訂正を見出すと、何を根拠にして訂正者は訂正を施したかが気にかかる。綴りの間違いや文法上の間違いであれば、訂正者の知識で訂正することも可能であり、許されることと思われる。勿論、底本と見比べて食い違いを見出して、訂正を施したことも十分に考えられる。新たに写本を作成する際に、写字生はひとつの底本を手がかりにして写本を作成したのであろうか。

30 Zuntz, *The Text of the Epistles*, 254–55; Royse, *Scribal Habits*, 230–31.

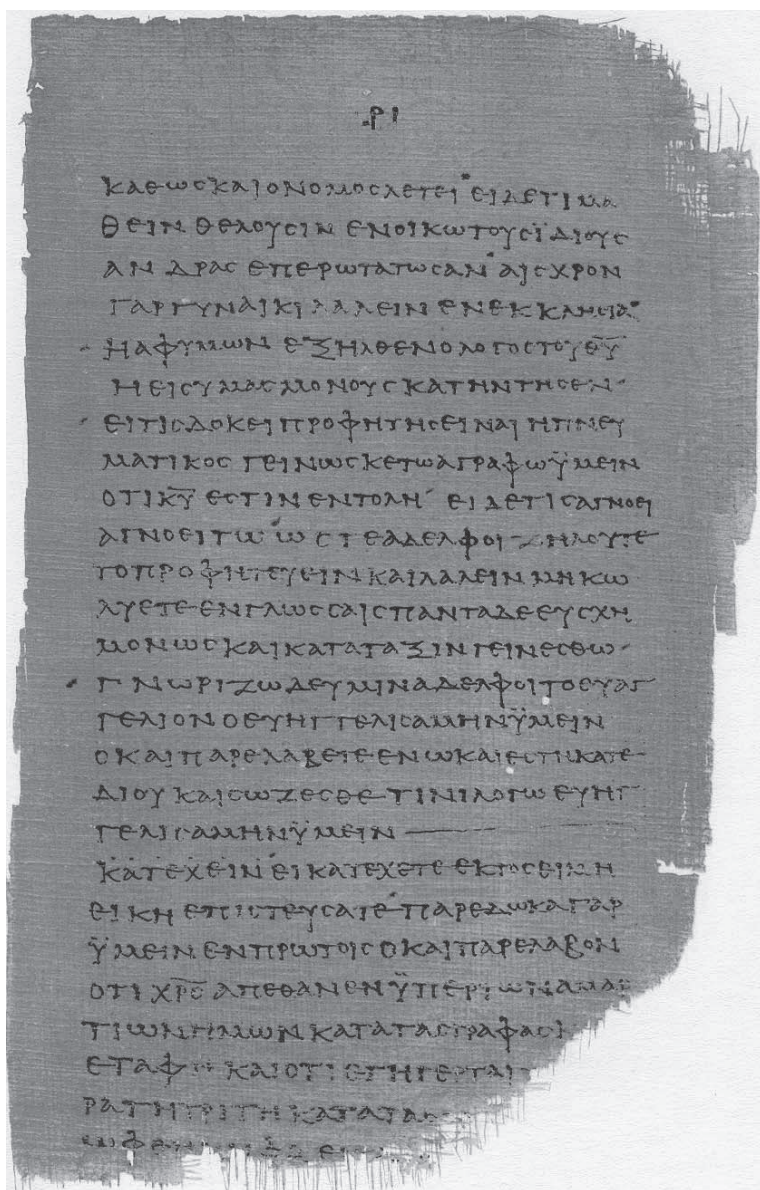


写真2 パピルス 46 番の 110 頁 (チェスター・ビーティー図書館蔵)

とりわけ、これまで見てきたように、写字生と他に「正規の」訂正の手があるような状況では、より良い写本を作成するために、もう少し良い体制が整っていた可能性は考えられないであろうか。このような疑問に対する答えがコリント人への手紙第一6章14節(87頁4行目)には、多少なりとも示唆されているように思われる。87頁4行目の右端には、二度も訂正が施された形跡が残っている。先ず $\epsilon\zeta\epsilon\rho\epsilon\iota$ と記したものを一旦 $\epsilon\zeta\epsilon\rho\epsilon\iota$ と訂正し、さらに $\epsilon\zeta\eta\rho\epsilon\iota\pi\epsilon\iota$ と再度訂正している。二つ目のエプシロンの上にエーターが書き記され、前のイオータは一度消された後に、もう一度上に書き加えられている。最後のイオータは最終的にはニューに書き換えられている。Nestle-Aland 28版の脚注 (textual apparatus) には以下のように記されている。

$\epsilon\zeta\eta\rho\epsilon\iota\pi\epsilon\iota$ P^{46c2} B 6. 1739 it vg^{mss}; Ir^{lat v.l.} Or^{1739mg}
 $\epsilon\zeta\epsilon\rho\epsilon\iota$ P^{11 46*} A D* P 1241
txt P^{46c1} Σ C D² K L Ψ 33. 81. 104. 365. 630. 1175. 1505. 1881.
 2464 \mathfrak{M}^{31} vg sy^h co; Ir^{lat} Tert Meth Ambst

上記の *txt* とは、Nestle-Aland 28版の本文に採用された $\epsilon\zeta\epsilon\rho\epsilon\iota$ という読みである。いずれの読みも同じ動詞の異なる時制形である。アオリスト時制形 $\epsilon\zeta\eta\rho\epsilon\iota\pi\epsilon\iota$ はパピルス46番の二番目の訂正の手、ヴァティカン写本、小文字写本1739などの支持があり、現在時制形 $\epsilon\zeta\epsilon\rho\epsilon\iota$ は、パピルス11番、パピルス46番の最初の手、アレクサンドリア写本、クラロモンタヌス写本の最初の手などで証言されている。未来時制形 $\epsilon\zeta\epsilon\rho\epsilon\iota$ は、パピルス46番の一番目の訂正の手、シナイ写本、エフライミ写本、クラロモンタヌス写本の二番目の手、ほとんどの小文字写本、教父たちなど圧倒的多数の写本から支持されているので、Nestle-Aland 28版の本文に採用されて当然のようにも思われる。ところが、コリント人への手紙第一6章14節の本文に立ち返って見ると、未来時制が当然の読みであって、むしろアオリスト時制や現在時制の読みが生じたことの方を考慮しなければならない。アオリスト時制は、節の前半の「神が主をよみがえらせた ($\eta\gamma\gamma\epsilon\iota\pi\epsilon\iota$)」の影響で生じた読みと思われる。いずれにしても、シナイ写本、アレクサンドリア写本、ヴァティカン写本の「三大写本」の証言が三つの読みに分かれていることは興

31 この記号は、Nestle-Aland で大多数の小文字写本を指す。

味深く、重大で、ある意味では三つの読みが同じように支持されていると言えるかもしれない。

ここで指摘しておきたいことは、パピルス 46 番のコリント人への手紙第一 6 章 14 節の本文に施された二度の訂正が、訂正者の独自の判断に基づいたというよりも、手許にあった写本の読みに基づいた訂正であった可能性が考えられる点である。写字生が、手許の底本を見ながら、パピルス 46 番を作成し、書写終了後に本人、そして別の訂正者が書写された本文を底本に照らして点検しただけではなかった。既に複数の写本が収集されていて、複数の本文を比較検討して、本文を検証するような作業があったことが想定できる。写字室（スクリプトorium）という少し大袈裟であるが、ここに後代の写字室の雛形を見出すことができるかもしれない³²。

3. 「唯一の読み」の意義

ここで、「唯一の読み（singular reading）」と言うのは、他の写本には全く見出されない独自の読みのことである。他の写本には見出せないパピルス 46 番のみに見出すことができる読みが、パピルス 46 番の唯一の読みである。そのような特異な読みは、その写本を書写した写字生が作り出した読みである、と Colwell は論じる³³。新約聖書のように、膨大な数の写本が作成された場合には、他の写本に見出されない読みとは、その写本を書写した写字生が作り出した読みである蓋然性が高い、と。この Colwell の理論に基づいて James R. Royse は主要なパピルス写本（チェスタービーティーおよびボドメールパピルス）にあたって唯一の読みを洗い出して、新約聖書の初期のパピルス写本を作成した写字生たちの書写作業の傾向を体系的に分析しようと試みた³⁴。他の古代の文書に比べると新約聖書を構成する各書については膨大な量の写本が作成されたことは事実である。だからといって、他の写本に

32 Zuntz, *The Text of the Epistles*, 256-57; James R. Royse, "Early Text of Paul (and Hebrews)," in *The Early Text of the New Testament*, ed. Charles E. Hill and Michael J. Kruger (Oxford: Oxford University Press, 2012), 182.

33 Ernest C. Colwell, "Method in Evaluating Scribal Habits: A Study of P⁴⁵, P⁶⁶, P⁷⁵," in idem, *Studies in Methodology in Textual Criticism of the New Testament* (New Testament Tools and Studies; Leiden: E.J. Brill, 1969), 106-24.

34 Royse, *Scribal Habits*.

は全く見出されない読みは、その写本の写字生が作り出した読みである、と断定できるのであろうか。

「唯一の読み」とは、上記した通りに、他の写本に見出されない唯一の読みのことである。ただ唯一の読みとは言っても、あくまでも現存する写本の読みとして唯一ということであって、失われた写本の読みは考慮されない。写字生が底本に見出した読みであれば、他の写本に残る可能性は高い。同一の写字生であれ、他の写字生であれ、同じ底本から書写して写本を作成するのであれば、その底本に見出される読みは、書き写し間違いをしない限り、他の写本に残る筈である。しかし、同じ読みを本文に採用した写本が失われたかもしれない。言い換えると、パピルス 46 番に見出された唯一の読みとは、(1) パピルス 46 番の写字生が作り出した読みであったとすると、パピルス 46 番は他の写本の底本としては用いられなかったか、仮に用いられたとしても、この読みは間違いと判断されて本文から排除されたか、あるいは本文に採用された写本はすべて失われた。(2) パピルス 46 番の底本にあった読みであったとすると、パピルス 46 番の本文にしか採用されなかったか、書き写し間違えて他の写本には採用されなかったか、あるいは、同じ底本を用いた写本はすべて失われたかどれかである³⁵。

パピルス 46 番の唯一の読みの例をいくつか挙げておく。これらは間違いとは断定できないが、パピルス 46 番のみに見出され、他の写本には見出されない読みであるので、正しい読みである蓋然性は余り高くない。ヘブル人への手紙 10 章 14 節で $\lambda\gamma\iota\alpha\zeta\omicron\mu\epsilon\nu\omicron\gamma\varsigma$ の代わりにパピルス 46 番 (61 頁 15～16 行目) では $\alpha\lambda\alpha\omega\zeta\omicron\mu\epsilon\nu\omicron\gamma\varsigma$ が見出される。コリント人への手紙第一からもいくつかの例を列举すると、1 章 8 節で $\epsilon\omega\varsigma\ \tau\epsilon\lambda\omicron\gamma\varsigma$ の代わりにパピルス 46 番 (75 頁 9 行目) では $\tau\epsilon\lambda\epsilon\iota\omicron\gamma\varsigma$ と書き記されている。1 章 21 節では $\theta\epsilon\omicron\gamma$ の代わりにパピルス 46 番 (76 頁 18 行目) では $\kappa\omicron\varsigma\mu\omicron\gamma$ と書かれている³⁶。10 章 27 節で $\epsilon\varsigma\theta\iota\epsilon\tau\epsilon$ の代わりにパピルス 46 番 (99 頁 17 行目) では $\phi\lambda\gamma\epsilon\varsigma\theta\epsilon$ と書かれている。14 章 25 節で、 $\kappa\alpha\rho\ \delta\iota\alpha\varsigma$ の代わりにパピルス 46 番 (109 頁 2 行目) では

35 このあたりの理論的な課題については、TC: *A Journal of Biblical Textual Criticism* 17 (2012) (<http://rosetta.reltech.org/TC/v17/index.html>) の Panel Review “Scribal Habits in Early Greek New Testament Papyri: Papers from the 2008 SBL Panel Review Session” by Juan Hernández Jr, Peter M. Head, Dirk Jongkind, and James R. Royse, 特に Dirk Jongkind を参照のこと。

36 Nestle-Aland 28 の脚注には記載がない異読である。

ΔΙΑΝΟΙΑC が記されている。ガラテヤ諸教会宛ての手紙 2 章 5 節で ΕΥΑΓΓΕΛΙΟΥ の代わりにパピルス 46 番では ΘΥ とある。ΘΥ は「ノーメン・サクム」であるので、パピルス 46 番 (160 頁 13 行目) では「福音の真理」ではなく「神の真理」となる。

このような唯一の読みの場合に、パピルス 46 番がすべて間違っているとは言い切れないが、逆にパピルス 46 番のみが正しい読みを残していると断言することも難しい。Colwell の理論の通りに、唯一の読みであれば、その写本を作成した写字生が作り出した読みである蓋然性が高いかもしれない。しかし、その読みは失われた底本に存在していた可能性は皆無ではない。あるいは、パピルス 46 番を底本として写本を作成した写字生が、その唯一の読みを訂正しないで、そのまま書き写したかもしれないが、そのような写本は、後に失われたかもしれない。個々の箇所の個々の読みに当たって検討することが必要不可欠である。それでも、確かな結論に到達するのは容易ではないかもしれない。

例えば、上記のヘブル人への手紙 10 章 14 節の場合、パピルス 46 番では 9 章 3 節 (57 頁の 2 行目の右端) で ΛΓΙΑ と書くべきところに ΑΝΑ と記されている。10 章 14 節の ΛΓΙΑΖΟΜΕΝΟΥC の語頭 ΛΓΙΑ の代わりに ΑΝΑ と間違えて書けば、ΑΝΑΖΟΜΕΝΟΥC となり、CΩ を挿入して ΑΝΑCΩΖΟΜΕΝΟΥC とすることは容易い。ところで、ガラテヤ諸教会宛ての手紙 2 章 5 節では通常「福音の真理 (ΑΛΗΘΕΙΑ ΤΟΥ ΕΥΑΓΓΕΛΙΟΥ)」という読みが見出されるのに対して、パピルス 46 番のみで「神の真理 (ΑΛΗΘΕΙΑ ΤΟΥ ΘΥ)」という読みが見出される³⁷。Royse 曰く、「神の真理」という表現は、パウロ書簡中ローマ人への手紙 1 章 25 節、3 章 7 節、15 章 8 節に見出される一方で、「福音の真理」はガラテヤ諸教会宛ての手紙 2 章 5 節と 14 節のみに見出される。より一般的な「神の真理」という表現に影響されて、パピルス 46 番の写字生は「福音の真理」を間違えて「神の真理」と書いた、と断定する³⁸。それほど単純に判断できる現象とは思われないが、如何であろうか。むしろ、ガラテヤ諸教会宛ての手紙では「福音の真理」は (表現としては二回しか用いられていないが) 鍵となる概念であって、それを「神の真理」と変更するのは、それほど容易い変更とは思われない。少なくとも、一つの可能性として「神の真理」

37 Nestle-Aland 28 の脚注には記載がない異読である。「ノーメン・サクム」の ΘΥ と ΕΥΑΓΓΕΛΙΟΥ の語頭の ΕΥ を写字生が見間違える混同することは十分に考えられる。ただ、単語の長さが大きく異なるので、両者を間違える可能性は低いように思われるが。

38 Royse, *Scribal Habits*, 354.

という唯一の読みが正しい読みである可能性を探ってみる価値はあるように思われる。他の写本がすべて間違っていると考えerるのには抵抗を覚えるかもしれないが、要はパピルス 46 番と同じ読みを採用した写本が失われた、ということかもしれない。

4. ローマ人への手紙 16 章

本文研究上、有名で、新約聖書の本文研究の教科書的な書籍³⁹で必ず取り上げられるような箇所がパウロ書簡にも何カ所がある。例えば、ローマ人への手紙 5 章 1 節⁴⁰、テサロニケ人への手紙第一 2 章 7 節⁴¹である。パピルス 46 番はパウロ書簡集であったので、当初はそのような箇所も一部であったと思われるが、パピルス 46 番には残念ながら、この 2 箇所に該当する部分は現存しない。現存するパピルス 46 番で、本文研究上一番興味深い箇所は、ローマ人への手紙 16 章であろう⁴²。詳細な点とはともかく、大まかに言えば、パピルス 46 番では、ローマ人への手紙 15 章の終わりに、16 章 25 節から 27 節の頌栄が置かれて、その後には 16 章 1-23 節の挨拶が記載されている。

より詳細に見ていくと、パピルス 46 番の 38 頁 9 行目から 10 行目にかけてローマ人への手紙 15 章 33 節が見出される。15 章 33 節の「アーメン (ΑΜΗΝ)」はな

39 Bruce M. Metzger and Bart D. Ehrman, *The Text of the New Testament: Its Transmission, Corruption, and Restoration* (4th ed.; New York/Oxford: Oxford University Press, 2005); Kurt Aland and Barbara Aland trans. by Erroll F. Rhodes, *The Text of the New Testament: An Introduction to the Critical Editions and to the Theory and Practice of Modern Textual Criticism* (Grand Rapids: William B. Eerdmans Publishing Company, 1989); David C. Parker, *An Introduction to the New Testament Manuscripts and Their Texts* (Cambridge: Cambridge University Press, 2008)

40 Metzger and Ehrman, *The Text of the New Testament*, 255; Aland and Aland, *The Text of the New Testament*, 286.

41 Metzger and Ehrman, *The Text of the New Testament*, 329-30; Aland and Aland, *The Text of the New Testament*, 283-85.

42 ローマ人への手紙 16 章の本文上の課題に取り組んだ古典的な書としては Harry Y. Gamble, *The Textual History of the Letter to the Romans* (Grand Rapids: William B. Eerdmans Publishing Company, 1979) が ある。Parker, *An Introduction to the New Testament Manuscripts and Their Texts*, 270-74 も参照のこと。

く、10 行目の途中から 16 章 25 節以降の頌栄が書き記されている。16 章 27 節は、19 行目冒頭の「アーメン (AMHN)」で終わっている。その後にローマ人への手紙 16 章 1 節以降の挨拶が書き留められている。

このようなパピルス 46 番の 38 頁の本文から、先ず 16 章 1 節から 23 節の挨拶がない本文が少なくとも一時的に（あるいは地域的に）流布していたことが想定できる。紀元 200 年頃に作成されたローマ人への手紙の写本であるパピルス 46 番の本文に、16 章 1 節から 23 節がないままで流布していた本文があり、後で、その挨拶が付け加えられた痕跡があることは驚きかもしれない。ローマ人への手紙の終わり方を巡っては、この挨拶の部分を含めて、様々な興味深い仮説が提案されてきた。関連して、興味深いことに、宛先（1 章 7 節⁴³15 節⁴⁴）の「ローマ」が欠落している写本も見出されている。そのために、ローマ人への手紙は本来、回覧形式の手紙であったのではないか、16 章の挨拶は、元来、別の場所に宛てて書き送られた手紙の挨拶部分であったのではないか、など様々な仮説が提案されてきた⁴⁵。

ローマ人への手紙が手紙であったことを考慮し、しかもその手紙が本来の宛先であったローマ教会とは別の場所で読まれる状況を考察すれば、それほど不思議な現象ではなく、十分に説明できる。手紙とは、本来、差出人から宛先の個人または集団に宛てて書き送られた文書である。本当の手紙であれば、具体的な読者が一義的に想定されている。ところが、何らかの理由でそれが一義的な読者とは異なる人たちの手に渡し、その人たちが読み親しむようになると、その手紙は当初の執筆目的や意図から自ずと逸脱した機能を果たすようになる。とりわけ手紙の挨拶の部分とは、当初の手紙の受信者にとっては意味があり、重要なものであるが、それ以外の人たちにとっては余り重要ではない。パウロの手紙が宛先とは異なる教会で読まれたり、書簡集として収集されたり、最終的には新約聖書と呼ばれる聖書の一部に組み込まれたりすると、必然的に手紙という性質にある変化がもたらされる。

ローマ人への手紙に即して言うならば、あくまでもパウロはローマのキリスト者たちに伝えたいことがあったので、ローマ教会宛てに手紙を書き送った。ところが、ローマ以外のキリスト者たちも、この手紙に価値を見出して、好んで読み、さらに写本も作成した。すると、当初パウロがローマのキリスト者たちに伝えたいと思っ

43 Nestle-Aland 28 の脚注によると G; Or^{1739mg}。

44 Nestle-Aland 28 の脚注によると G。

45 例えば、T.W. Manson, "Paul's Letter to the Romans-and Others," in K. P. Donfried (ed.), *The Romans Debate* (rev. and enl. Ed.; Peabody: Hendrickson, 1991), 3-15.

ていた具体的なことから離れて、より普遍的な内容に焦点を合わせて読まれるようになった、と思われる。即ち、ローマ教会宛ての手紙としてローマ教会という具体的な状況で読まれるのではなく、より普遍的でより神学的な内容の文書として読まれるようになった。

もちろん、手紙は、当初一通しかなかった⁴⁶が、ローマ教会の人も含めて様々な人たちが読みたいと思って、書き写して写本が作成されるようになった。そして、パピルス紙が決して安価でなく、書写の作業が素人にとって決して容易い作業でなかったことを踏まえると、1章1節から16章27節までを忠実に書写することはなかった。そういう状況で、真っ先に16章の挨拶の部分が省略されることになったのは、想像に難くない。その結果、16章の挨拶の部分が欠落した写本ができ、頌栄が15章の終わりに付け加えられた。と同時に、16章の挨拶も明記された写本もあり、本来は16章の挨拶があったことに気が付いた写字生たちもいた。その結果、パピルス46番のような本文が生まれたと思われる。

パピルス46番のローマ人への手紙16章の本文では、異読が比較的多いが、特に興味深い異読が5節7節15節に見出せる。5節には「初穂」を意味する $\alpha\pi\alpha\rho\chi\eta$ という名詞が用いられているが、パピルス46番では $\alpha\pi\alpha\rho\chi\eta\varsigma$ となっている(39頁7行目)。つまり、 $\alpha\pi\omicron+\alpha\pi\alpha\rho\chi\eta\varsigma = \alpha\pi' \alpha\rho\chi\eta\varsigma$ (「初めから」を意味する)を意図した読みである。初穂というギリシア語単語を知らなかったために生じた異読であるか、単語と単語の区切り方を間違えたために生じた異読であると思われる。ところが、 $\omicron\varsigma \epsilon\varsigma\tau\iota\nu \alpha\pi' \alpha\rho\chi\eta\varsigma \tau\eta\varsigma \lambda\omicron\gamma\iota\alpha\varsigma \epsilon\iota\varsigma \chi\rho\iota\varsigma\tau\omicron\nu$ (「彼は、キリストへアジアの初めからである」)では、文が上手く続かない。やはり $\alpha\pi\alpha\rho\chi\eta$ が元来の読みであったと思われる。

7節と15節には固有名詞の「間違い」が見出される。7節の Ἰουνίαν が ΙΟΥΛΙΑΝ に(39頁10行目)、15節では Ιουλίαν, Νηρέα が ΒΗΡΕΑ ΚΑΙ ΛΟΥΛΙΑΝ となっている(40頁3行目)。7節の方は、ニュー(N)とラムダ(λ)を混同した結果、間違えたことが考えられる。15節に関しては、当初は二人の名前の順序が逆になっていただけであったが、そのことをギリシア語のアルファベットで表示した。ニューの上にベーター、イオータの上にアルファを書いて、後の名前(ΙΟΥΛΙΑΝ)が先で、

46 あるいは、パウロが記録として「カーボンコピー」を手許に保管していた可能性はある。そうすると、書簡集が早期に成立できた事情は説明しやすくなるが、今のところ明確な証拠はない。後代の例を挙げれば、ジュネーヴの改革者であるジャン・カルヴァンは、手紙の「カーボンコピー」を保管していた。

前の名前 (NHPEA) が後であることを訂正者は表示したつもりであった (Ἡ NHPEA KAI ἸΟΥΛΙΑΝ)。ところが、写字生はニューがベーターに、イオータがアルファに訂正されていると誤解して「訂正」したために、パピルス 46 番の本文に見られる名前に変更したと想定できる⁴⁷。このような間違いが生じた経緯の説明以上に、名前が徐々に単なる名前となり、ほとんど意味が失われている様子が興味深い。当初の手紙の宛先であるローマの教会でなら、いざ知らず、後代の諸教会でローマ人への手紙が読まれる際には、16 章が余り重要でなくなり、単なる名前の羅列になっていたことが窺える。

5. 終わりに

パピルス 46 番がどのような写本であるか概観してきた。パピルス写本としては 100 頁もある大部な写本であるので、このような小文で網羅しきれない面は多々あるが、最古のパウロ書簡集であるパピルス 46 番がどのような写本であるか、多少なりとも全体像が分かり易いように概観してみた。

G. Zuntz は、パピルス 46 番の初期の研究で、ヘブル人への手紙とコリント人への手紙の本文を中心にして取り扱っている。そして、書写の間違いが多く、しかも憶測に基づく古代の校訂を保存しているので、パピルス 46 番の単独の証言による読みは受け入れるべきではない、と指摘する。その上で、Zuntz がパピルス 46 番の本文で優れていると評価できる、具体的な箇所を例に挙げて論じている⁴⁸。ところが、Zuntz が評価するような読みは、Nestle-Aland 28 版では、ほとんど本文に採用されていない。このような意見不一致に、本文研究という専門分野がどのような専門分野であるか示唆されているようにも思われる。本文研究という専門分野が主観的な判断に依存して左右せざるを得ないので、より科学的学問に整えるために、統計学的手法が Nestle-Aland の改訂過程で導入されたのかもしれない⁴⁹。

47 Royse, *Scribal Habits*, 332-35.

48 Zuntz, *The Text of the Epistles*, 23-34. 具体的にはコリント人への手紙第一 2 章 4 節、ヘブル人への手紙 12 章 1 節、コリント人への手紙第一 14 章 39 節である。

49 Gerd Mink, "Contamination, Coherence, and Coincidence in Textual Transmission: The Coherence-Based Genealogical Method (CBGM) as a Complement and Corrective to Existing Approaches," in *The Textual History of the Greek New Testament: Changing Views in Contemporary Research*, ed Klaus Wachtel and Michael W. Holmes (Text-Critical Studies 8; Atlanta: Society of Biblical Literature, 2011), 141-216.

仮に、最古のパウロ書簡集の写字生の仕事がお粗末で、本文が信頼に足るものでないとしたら、パピルス 46 番を研究することにどのような意義があるのだろうか。パピルス 46 番がパウロ書簡集の最古の写本である以上、シナイ写本やヴァティカン写本などの優れた大文字写本よりも前に作成された。同時に、今は失われたが、シナイ写本やヴァティカン写本に残された本文を伝えた写本もパピルス 46 番と同じ時代にあったことが示唆されている。現在の本文研究の成果によると、パピルス 46 番よりも Nestle-Aland 28 版の方が原典により近い、正しい本文を提示している。そういう意味では、パピルス 46 番は、最古であっても最良の本文を伝えていないことになる。それでもパウロ書簡集の本文の変遷の一コマをパピルス 46 番は伝えている。パピルス 46 番のような変遷を経ないで正しい本文を保存して後代に伝えた写本もあったことが示唆される。そういう意味では、パピルス 46 番は「裏」の歴史かもしれないが、パウロ書簡集の本文の歴史の一コマを残していることは興味深く、意義深い。パウロの手紙の原典とシナイ写本やヴァティカン写本の間をストレートに橋渡しする写本ではないことは少し残念ではあるが、現存する本文が書写され、継承してきた様子を垣間見ることができることには違いない。他のパピルス写本をはじめ大文字写本などの本文と幅広く比較検討して、全体像をより良く把握することができるようになることを期待しつつ今後の課題として残したい。